

「阿波志」に記載されている産物 —徳島における近世の貝類・頭足類の利用・認識—

松田 春菜

The Recognition and Utilization of Mollusks and Cephalopods of Tokushima Prefecture through the “Awa-shi” in the Early Modern Period.

Haruna MATSUDA

抄 録

「阿波志」は江戸時代に編纂された徳島県の地誌で、城府と10郡それぞれの土地の沿革や寺社、土産などに関する情報がまとめられている。本稿では「土産」に記載されている貝類と頭足類について検討し、当時の生物資源の認識と利用の実態を把握することを目的とした。生物は多くが古名で書かれていたため、その名称とサイズ、特徴、地方名などの記述内容から種を推測した。本研究の結果、資源利用の地域ごとの違いや、現在との違いが浮かび上がってきたので報告する。

キーワード：阿波志，貝類，頭足類，江戸時代，徳島県

I はじめに

徳島県は豊かな海と川に恵まれ、そこで育まれる海産物を昔から利用してきた。食用としての利用以外にも、一部の種は都や朝廷への貢納品や藩の進物商品として重要な役割を持っていたことが古典籍に記載されている¹⁻³⁾。過去に利用されていた種の中には、現在も変わらず漁獲され、徳島県の特産物として位置づけられているものもあれば、沿岸環境や資源量の変化、食文化の変化等により利用が減少していったものもあると考えられる。

各地の地誌には過去の自然環境や生物に関連した人々の営みが記録されている。全国的に産物調査が行われた江戸時代には、徳島県でも阿波志や阿淡産志等多くの地誌が編纂された⁴⁾。阿波志は阿波国各地の庄屋・政所に調査項目を示して提出させた資料を基に、徳島藩儒の佐野山陰が1815年に完成させたもので、当時の城府と10郡（板野郡、阿波郡、美馬郡、三好郡、麻植郡、名東郡、名西郡、勝浦郡、那賀郡、海部郡）それぞれについて沿革、村里、貢租、戸口、土産といった情報がまとめられている。「土産」には鮎物、農産物、水産物、野生生物等に関する情

報が記載されており、近世におけるその土地の産物を知る重要な資料となっている。これらの情報はその後の地誌にも引用されているが^{2,5)}、生物種については現在の和名との対応関係は不明なものも多く、内容が十分に検討されているとは言えない。そこで、江戸時代に認識されていた生物資源とその利用を把握するため、阿波志に記載されている「土産」から産物の詳細を明らかにすることを試みた。本稿では貝類と頭足類について取り上げる。

II 方法

阿波志には諸本存在する。蜂須賀家旧蔵品は徳島城博物館に所蔵されており、その影印本が徳島県立博物館によってテキストデータ化され、閲覧が可能となっている (<https://museum.bunmori.tokushima.jp/hasegawa/shiryou/awashi.html>, 2022年1月26日参照)。また、阿波国文庫の印がある資料は国立国会図書館デジタルコレクションで確認することができる (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2609491?tocOpened=1>, 2022年1月26日参照)。それぞれに異体字や誤脱が見られるため⁶⁾、本研究では漢文で書かれたこれら

の阿波志を参照するとともに、1931年に笠井藍水が漢文を書き下した阿波誌⁷⁾を参考にし、内容を解読した。

阿波志の「土産」には、名称のみが記載されたものと、名称と説明文とが記載されたものの両方があり、これらの内容から生物名(標準和名)を推定した。ただし、書かれている古名が必ずしも現在の和名に対応していないこと⁸⁾、当時は現在ほど種を細かく区別していなかった可能性があることから、種レベルの特定が困難な場合にはいくつかの種を含む属のレベル、もしくはさらに上位の階級である科レベルや目レベル、綱レベルの特定を目指した。推定の際には和漢三才図会(寺島良安, 1713年, 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1876655>, 2022年1月25日参照)や目八譜(武蔵石壽, 1843年, 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1286773?tocOpened=1>, 2022年1月25日参照)等の江戸時代の主要な古典籍を参考にした。説明文には郷名(=地方名)が記載されていることがあり、徳島県の地誌から方言についても調査した。

「土産」の中には加工産品等について記している「製造」と、異質(特殊)な産物を記したと思われる「異産」の項目がある。この中からも貝類と頭足類に関連する情報はすべて抽出し、検討した。

Ⅲ 対象地域

阿波志の「土産」に貝類・頭足類が含まれていたのは、10郡のうち海に面する5郡(板野郡, 名東郡, 勝浦郡, 那賀郡, 海部郡)のみであり、この5郡を対象地域とした。なお、阿波国が10郡に再編成されたのは寛政4年(1664年)で、このときの郡範囲は現在の範囲とは異なっている⁹⁾。近世と現在の海岸線沿いの郡界は以下の通りである(阿波志の掲載順)。

(近世)板野郡:(現在)鳴門市, 板野郡松茂町, 吉野川以北の徳島市(川内町)

(近世)名東郡:(現在)吉野川以南(沖洲), 勝浦川以北(津田)

(近世)勝浦郡:(現在)勝浦川以南(徳島市大原町)

～立江川左岸(小松島市金磯町)

(近世)那賀郡:(現在)立江川右岸(小松島市豊浦町), 和田島町, 阿南市

(近世)海部郡:(現在)海部郡美波町～穴喰町

Ⅳ 結果

阿波志の「土産」における貝類および頭足類の記載項目数は5郡でのべ47件存在した。郡ごとの項目数は当時の板野郡が最も多く23件, 那賀郡9件, 名東郡8件, 海部郡5件, 勝浦郡2件であった。

以下に項目ごとの阿波志記載名称, 阿波誌記載名称, 阿波誌で書き下された説明文の現代語訳, 推定された生物の和名(もしくは科名, 目名, 綱名)・命名者(古典を出典とする場合は略名)・学名・和名の漢字表現を記す。説明文の現代語訳の括弧内の内容は, 補足として追加した情報である。基本的に命名者と和名の漢字による表現は肥後・後藤¹⁰⁾に基づき, 学名は奥谷¹¹⁾に従って記載した。また, 推定の理由や特記事項について備考に記した。各項目の番号は各郡の掲載順に付けたものである。

※□は表外漢字や難書漢字

1 板野郡

1) 阿波志記載名称: 鳥賊

阿波誌記載名称: 鳥賊

和名はイカ, 形は革袋に似ている。骨(甲)は小舟に似ている。

・コウイカ科 Sepiidae

備考: 甲の特徴から石灰質の甲を持つコウイカ科と考えられる。

2) 阿波志記載名称: 柔魚

阿波誌記載名称: 柔魚

地方名はスルメイカ。スルメの材料となる。

・スルメイカ(方言-佐々木, 1929) *Todarodes pacificus* Steenstrup, 1880

3) 阿波志記載名称: 章魚

阿波誌記載名称: 章魚

和名はタコ。

・マダコ(池田作次郎, 1902) *Octopus vulgaris* Cuvier, 1797

- 備考：テナガダコとイイダコが別項目（板野郡－4, 5）で記載されていることから、近海で採れる代表種のマダコであろう。
- 4) 阿波志記載名称：石距
阿波誌記載名称：石距
地方名テナガダコの仲間。身（外套部）は小さく脚（腕）は長い。その土地のある人は食わず、蛇が変化したものだという。冬時期は味がよい。
・テナガダコ（図会）*Callistoctopus minor* (Sasaki, 1920)
- 5) 阿波志記載名称：望潮魚
阿波誌記載名称：望潮魚
地方名はイイダコ。タコの仲間。身（外套部）は鳥の卵のようで中には白い粒がある。春の終わり頃に多く出現する。
・イイダコ（大和本草）*Amphioctopus ocellatus* (Gray, 1849)
- 6) 阿波志記載名称：石決明
阿波誌記載名称：石決明
和名はアワビ。
・ミミガイ属 *Haliotis*
備考：「石決明」はミミガイ科に属するアワビ類の総称である²⁾。周辺に生息するクロアワビ *Haliotis (Nordotis) discus discus* Reeve, 1846, メガイアワビ *H. (N.) gigantea* Gmelin, 1791, マダカアワビ *H. (N.) madaka* (Habe, 1979), トコブシ *H. (Sulculus) diversicolor aquatilis* Reeve, 1846 を総称していると考えられる。
- 7) 阿波志記載名称：拳螺
阿波誌記載名称：拳螺
和名はサザエ。
・サザエ（和鈔）*Turbo (Batillus) cornutus* Lightfoot, 1786
- 8) 阿波志記載名称：牡蠣
阿波誌記載名称：牡蠣
和名はカキ。大きいものでは1尺（30cm）を超え、黄蠣ともいう。
・マガキ（方言－岩川, 1905）＝カキ（目八）*Crassostrea gigas* (Thunberg, 1793) 真牡蠣
・イワガキ（平瀬, 1909）*Crassostrea nippona* (Seki, 1934)
- 備考：「牡蠣」はイタボガキ科に属する二枚貝の総称である¹²⁾。マガキが最も普通に見られるが、大きいものでは30cmを超えるという記述内容からマガキのほかに大型になるイワガキが含まれている可能性がある。
- 9) 阿波志記載名称：魁蛤
阿波誌記載名称：魁蛤
和名はキザ。地方名はアカガイ。
・アカガイ（和鈔）*Scapharca broughtonii* (Schrenck, 1867)
備考：地方名はアカガイと書かれているが、アカガイの他にクイチガイサルボウ *S. inaequivalvis* (Bruguière, 1789) やサルボウ *S. kagoshimensis* (Tokunaga, 1906), ハイガイ *Tegillarca granosa* (Linnaeus, 1758) 等が含まれている可能性がある。
- 10) 阿波志記載名称：海蛤
阿波誌記載名称：海蛤
地方名をオオハマグリもしくはクチブトという。海産個体は殻が厚く斑紋がない。李時珍は海錯（海洋生物）の総称としたが、多分違う。
・チョウセンハマグリ（目八）*Meretrix lamarckii* Deshayes, 1853
備考：「海蛤」は本草書と現代の文献の両方において一種を指す名称ではないとされ、種を特定することは困難である¹³⁾。地方名の「クチブト」については、和漢三才図会の「蛤蜊」の地方名として阿波の「口ブト」が含まれており¹⁴⁾、怡顔齋介品（松岡玄達, 1758年, 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00015094#?c=0&m=0&s=0&cv=0&r=0&xywh=-2303%2C-172%2C8984%2C3427>, 2022年1月25日参照）では、これがチョウセンハマグリであることが示されている。また、徳島県で「クチブト（口太）」と呼ばれていたのは撫養川口千石洲から小島の間と里浦村の沖洲（現在の鳴門市鳴門町土佐泊浦, 里浦町里浦）で採集されるハマグリ類で、

- 貝殻が厚いものを指していた^{15, 16)}。これら
 のことから、本項目はハマグリより殻の厚
 いチョウセンハマグリだと考えられる。
- 11) 阿波志記載名称：文蛤
 阿波誌記載名称：文蛤
 和名はハマグリ。沿岸域に現れる。
 ・ハマグリ（目八）*Meretrix lusoria* (Röding, 1798)
 文蛤・浜栗
 備考：「文蛤」の漢字は文様のある個体を指して
 いる⁸⁾。ハマグリは内湾の潮間帯から水深
 10メートルぐらいの砂泥底に生息する。本
 項目はチョウセンハマグリに比べて模様
 が多いハマグリであると推測される。
- 12) 阿波志記載名称：蜆
 阿波誌記載名称：蜆
 古くから流れる川に多い
 ・ヤマトシジミ（岩川, 1909）*Corbicula japonica*
 Prime, 1864
 ・マシジミ（岩川, 1909）*Corbicula fluminea* (O. F.
 Müller, 1774)
 備考：在来種では、汽水域にはヤマトシジミ、淡
 水域にはマシジミが主に分布する。生息域
 に関する詳細が書かれていないため種レベ
 ルの特定は難しいが、どちらかもしくは両
 方を指すと考えられる。
- 13) 阿波志記載名称：玉珧
 阿波誌記載名称：いたらがひ
 地方名
 ・タイラギ（五介）*Atrina (Servatrina) vexillum*
 (Reeve, 1858)
 備考：地方名は記述されていない。「玉珧」はタ
 イラギを指す¹²⁾。石原⁶⁾は阿波誌に記載さ
 れている「いたらがひ」は「たいらがひ」
 の間違いとしている。イタラガイは目八譜
 の中でアカガイ、ハマグリ、ニシキガイ等
 複数の貝類の異名・地方名として挙げられ
 ているが、タイラギの異名としては記載さ
 れていない。したがって阿波誌の「いたら
 がひ」は記述ミスと考えられる。
- 14) 阿波志記載名称：蓼螺
 阿波誌記載名称：蓼螺
 地方名はナガニシ。
 ・ナガニシ（啓蒙）*Fusinus perplexus* (A. Adams,
 1864) 長辛螺
- 15) 阿波志記載名称：黄螺
 阿波誌記載名称：黄螺
 地方名はバイ。
 ・バイ（目八）*Babylonia japonica* (Reeve, 1842) 蜆
 備考：目八譜では婆伊（バイ）の異名・地方名と
 して「黄螺」が挙げられている。これはバ
 イに同定される¹⁷⁾。
- 16) 阿波志記載名称：紅螺
 阿波誌記載名称：紅螺
 地方名はアカニシ。味は拳螺（サザエ）に似る
 が劣る。
 ・アカニシ（啓蒙）*Rapana venosa* (Valenciennes,
 1846) 紅螺
- 17) 阿波志記載名称：竹蛭
 阿波誌記載名称：竹□
 和名はマテ。
 ・マテガイ（目八）*Solen strictus* Gould, 1861 馬
 刀貝・蛭貝
 備考：目八譜に掲載されている「竹蛭」はマテガ
 イに同定されている¹⁷⁾。
- 18) 阿波志記載名称：馬刀
 阿波誌記載名称：馬力
 和名はカラスガイ
 ・？淡水産二枚貝
 備考：阿波誌の「馬力」は「馬刀」の漢字変換ミ
 スと考えられる。日本では「馬刀」を海産
 のマテガイとする説と、淡水産の二枚貝と
 する説がある¹⁸⁾。説明文に書かれている「カ
 ラスガイ」も目八譜においてマテガイや淡
 水産二枚貝の異名・地方名として挙げられ
 ている。阿淡産志にも「馬刀」の項目があ
 り、イシガイ科の二枚貝について書かれて
 いること¹⁹⁾、板野郡の土産としてマテガイ
 に同定される項目（板野郡-17）が他にあ
 ることから本項目は淡水産二枚貝を指す可
 能性が高いと考えられる。

19) 阿波志記載名称：蛸

阿波誌記載名称：□

地方名はヨメガサラ。

- ・ヨメガカサ（目八）＝ヨメノサラ（大本）
Cellana toreuma (Reeve, 1855)

備考：目八譜の「蛸ヶ皿」は複数種の混合で、ヨメガカサの他にマツバガイ *C. nigrolineata* (Reeve, 1854), ベッコウザラ（＝ベッコウガサ） *C. grata* (Gould, 1859), アオガイ *Nipponacmea schrenckii* (Lischke, 1868), シボリガイ *Patelloida pygmaea* (Dunker, 1860) 等が含まれているとされる¹⁷⁾。本項目もヨメガカサの他に複数種を含んでいる可能性がある。

20) 阿波志記載名称：淡菜

阿波誌記載名称：淡菜

和名はイガイ。

- ・イガイ（目八） *Mytilus coruscus* Gould, 1861 貽貝，淡菜

【異産】

21) 阿波志記載名称：香螺

阿波誌記載名称：香螺

和名はヘナタリ。

- ・フトヘナタリ（岩川，1919） *Cerithidea moerchii* (A. Adams in G. B. Sowerby II, 1855) 太甲香
- ・ヘナタリ（目八） *Pirenella nipponica* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016
- ・カワアイ（六介） *Pirenella pupiformis* Ozawa & Reid in Reid & Ozawa, 2016 川合

備考：これまでフトヘナタリ，カワアイ，そしてヘナタリに「ヘナタリ」の名があてられていた⁸⁾。これらのいずれかを指すか複数を指すかは不明である。殻形が類似するウミニナ *Batillaria multiformis* (Lischke, 1869) やホソウミニナ *B. attramentaria* (A. Adams in G. B. Sowerby II, 1855) 等が含まれている可能性もある。

22) 阿波志記載名称：蓼螺子

阿波誌記載名称：蓼螺子

地方名はウミホオズキ。

- ・巻貝類の卵囊

備考：ウミホオズキは海産の巻貝が卵を保護するためにつくる卵囊の総称である¹²⁾。日和佐町郷土誌²⁰⁾によるとアカニシの卵塊をウミホオズキという。松茂町誌²¹⁾によるとアカニシの卵囊をナガホウズキと呼ぶ。

【製造】

23) 阿波志記載名称：蠟灰

阿波誌記載名称：かき灰

貝殻で灰を作る。石灰のようにはない。

- ・牡蠣灰

2 名東郡

1) 阿波志記載名称：竹蛭

阿波誌記載名称：まて

- ・マテガイ（目八） *Solen strictus* Gould, 1861 馬刀貝・蛭貝

2) 阿波志記載名称：牡蠣

阿波誌記載名称：牡蠣

大きいものでは1尺（30cm）を超える。

- ・マガキ（方言－岩川，1905）＝カキ（目八），
Crassostrea gigas (Thunberg, 1793) 真牡蠣
- ・イワガキ（平瀬，1909） *Crassostrea nippona* (Seki, 1934)

備考：板野郡の記載（板野郡－8）と同様に大型個体が30cmと書かれていることから，マガキのほかにイワガキを含む可能性がある。

3) 阿波志記載名称：文蛤

阿波誌記載名称：蛤

- ・ハマグリ（目八） *Meretrix lusoria* (Röding, 1798) 文蛤・浜栗

備考：板野郡－11と同じ名称（文蛤）で，次項目（名東郡－4）がチョウセンハマグリに同定されることから，本項目はハマグリだと推測される。

4) 阿波志記載名称：蛤蜊

阿波誌記載名称：蛤□

地方名はクチブト。

- ・チョウセンハマグリ（目八） *Meretrix lamarckii* Deshayes, 1853

備考：地方名が「クチブト」であることから、板野郡-10と同様にチョウセンハマグリを指すと推測される。ただし板野郡ではチョウセンハマグリと思われる項目は「海蛤」と書かれており、異なっている。

- 5) 阿波志記載名称：寒索吏
阿波誌記載名称：アサリ
ハマグリの中で、殻が白くて粗く、斑紋が1様ではない。
・アサリ（目八）*Ruditapes philippinarum* (A. Adams & Reeve, 1850)
- 6) 阿波志記載名称：花達皮
阿波誌記載名称：ハタビ
ハマグリに似る。貝殻は厚く、薄い模様がある。
・オキアサリ（目八）*Macridiscus multifarius* Kong, Matsukuma & Lutaenko in Kong, Matsukuma, Hayashi, Takada & Li, 2012
・コタマガイ（目八）*Macridiscus melanaegis* (Römer, 1860)
備考：目八譜では沖浅理の異名・地方名に「ハタビ」が含まれ、オキアサリに同定される¹⁷⁾。松茂町誌²¹⁾によると、「ハタビ」はオキアサリ、コタマガイの方言である。どちらかの種か両種を指すかは不明である。
- 7) 阿波志記載名称：買骨樂介
阿波誌記載名称：マクラガイ
ドブガイの非常に薄いもので、色は白く透きとおっている。
・？
備考：目八譜では現代のマクラガイのほかに「シオツガイ」の異名として「マクラガイ」の名前が挙げられている。シオツガイ *Petricolirus aequistriatus* (G. B. Sowerby II, 1874) などの可能性があるが断定は難しい。
- 8) 阿波志記載名称：黄私廉介
阿波誌記載名称：ワスレガイ
長円形、紫色の紋様と腹縁の鋸歯（腹縁内面に刻み目）がある。クチブトの一種。
・ワスレガイ（六介）*Cyclosunetta menstrualis* (Menke, 1843) 忘貝

備考：シマワスレ *C. concinna* (Dunker, 1865) やベニワスレ *Sunettina solanderii* (Ciray, 1825) の可能性もある

3 勝浦郡

- 1) 阿波志記載名称：烏賊
阿波誌記載名称：烏賊
・鞘形亜綱Coeleoida
備考：烏賊（イカ）は頭足類の十腕類に属する種類の総称である¹²⁾。甲殻の硬いコウイカ目を「烏賊」、柔らかいツツイカ目を「柔魚」と書き分けるという説があるが¹²⁾、ここで区別されているかは不明である。
- 2) 阿波志記載名称：牡蠣
阿波誌記載名称：牡蠣
・マガキ（方言-岩川, 1905）= カキ（目八）*Crassostrea gigas* (Thunberg, 1793) 真牡蠣
・イワガキ（平瀬, 1909）*Crassostrea nippona* (Seki, 1934)

4 那賀郡

- 1) 阿波志記載名称：烏賊
阿波誌記載名称：烏賊
・鞘形亜綱Coeleoida
- 2) 阿波志記載名称：章魚
阿波誌記載名称：章魚
・八腕形目Octopoda
備考：章魚（タコ）は頭足類八腕形目に属する軟体動物の総称である¹²⁾。特徴の説明は特になく、種の特定は困難である。
- 3) 阿波志記載名称：石決明
阿波誌記載名称：石決明
また、小さくて平たいものを地方名でながれこ、また、トコブシと呼ぶ。大きいものは1寸4, 5分 (4.2~4.5cm)。肉が多く、春季に多い。
・ミミガイ属*Haliotis*
備考：“また”から続く説明文はトコブシに関してのみ書かれているが、板野郡-6と同じく、クロアワビ、メガイアワビ、マダカアワビ、トコブシを指すと考えられる。

- 4) 阿波志記載名称：拳螺
阿波誌記載名称：拳螺
・サザエ（和鈔）*Turbo (Batillus) cornutus* Lightfoot, 1786
- 5) 阿波志記載名称：牡蠣
阿波誌記載名称：牡蠣
中林のものは1尺（30cm）を少し超える。味は劣る。
・マガキ（方言－岩川, 1905）＝カキ（目八）*Crassostrea gigas* (Thunberg, 1793) 真牡蠣
・イワガキ（平瀬, 1909）*Crassostrea nippona* (Seki, 1934)
- 6) 阿波志記載名称：玉珧
阿波誌記載名称：玉エウ（玉兆）
土地の人がタチガキと呼ぶのはタイラギ。橋浦のものは1尺4, 5寸（42～45cm）になり、板野郡産よりも大きい。
・タイラギ（五介）*Atrina (Servatrina) vexillum* (Reeve, 1858)
- 7) 阿波志記載名称：海扇
阿波誌記載名称：海扇
・イタヤガイ（本和）*Pecten albicans* (Schröter, 1802)
備考：目八譜の「海扇」はイタヤガイに同定されている¹⁷⁾。
- 8) 阿波志記載名称：蝸蠃
阿波誌記載名称：蝸蠃
和名はミナ、地方名は二ナ。下福井逆湍川に出現するものは尾（殻頂）が欠ける。
・カワニナ（目八）*Semisulcospira libertina* (Gould, 1859)
備考：阿波志の那賀郡の地図では、現在の福井町のあたりに「逆瀬川」と書かれている。説明文の「逆湍川」と同じかは不明である。
- 9) 阿波志記載名称：石介
阿波誌記載名称：石介
中林と下福井に出現する。
・イシガイ科 Unionidae
- 5 海部郡
- 1) 阿波志記載名称：鰺

- 阿波誌記載名称：鰺
いくつかの浜に出現するのは3種で、ヒラカは肉色がわずかに赤く味が良く上品。メダカは目が起きるもので中品。ムクロは甲が隆起するもので下品。大きい個体は8寸5分（約25cm）あまりで、浪華（大阪）に売り、次に城府に売る。水深20匁（1匁を7尺とした場合、約40m）で蓄養し、3, 4日すると味はますますよい。土地の人は鰺が藻を敷くと必ず大雨があるという。
・マダカアワビ（方言－吉良, 1946）*Haliotis (Nordotis) madaka* (Habe, 1979)
・メガイアワビ（方言－吉良改訂, 1946）*Haliotis (Nordotis) gigantea* Gmelin, 1791
・クロアワビ（方言－吉良, 1946）*Haliotis (Nordotis) discus discus* Reeve, 1846
備考：徳島県ではメガイアワビが「ヒラガイ」、マダカアワビが「メダカ」、クロアワビが「ムクロ」と呼ばれていた^{22, 23)}。このことから3種が含まれると判断した。ただし、甲（背）が隆起するという特徴はマダカアワビに当てはまるように考えられるため、どのように区別していたかは定かでない。現在はクロアワビが最も単価が高く、徳島県で特に重要な磯根資源であるが²³⁾、阿波志では3種の中で下品として扱われている。なお、以前は足の裏が青みがかかった黒色のクロアワビが雄、淡褐色のメガイアワビが雌と考えられていた⁸⁾。和漢三才図会には雌の方が味が優れていると記されており¹⁴⁾、近世では他の2種に比べて身の柔らかいメガイアワビが重宝されていたと考えられる。
- 2) 阿波志記載名称：拳螺
阿波誌記載名称：（記載なし）
・サザエ（和鈔）*Turbo (Batillus) cornutus* Lightfoot, 1786
- 3) 阿波志記載名称：蓼螺
阿波誌記載名称：蓼螺
味はからい。炙って食べるかあるいは酢につける。
・ナガニシ（啓蒙）*Fusinus perplexus* (A. Adams, 1864) 長辛螺

【異産】

4) 阿波志記載名称：鸚鵡螺

阿波誌記載名称：鸚鵡螺

地方名はフメツガイ。南州異物志によるとひっくり返した杯のような形で、鳥の頭に似ている。腹に向かってみればオウム（の嘴）に似る。

・オウムガイ（目八-岩川，1919）*Nautilus pompilius*
Linnaeus, 1758 鸚鵡貝

【製造】

5) 阿波志記載名称：乾鰯

阿波誌記載名称：乾鰯

延喜式に見られる。十枚を1組とする。阿部浦では毎年百組を献上し、米五石をもらう。よく割く者はわずかに2、3人である。

V 考察

阿波志の「土産」には貝類・頭足類がのべ47件記載されていた。海に面する5郡には全て貝類・頭足類が含まれていたが、それ以外では記載がなく、陸産貝類に関する記述も見られなかった。

記載項目数は板野郡が最も多く、23件であった。板野郡に位置する撫養および北灘地方については、村浦ごとの情報が鳴門辺集（作者不明，1795年）にも詳しくまとめられている⁴⁾。阿波志と鳴門辺集とは記載内容に差異があり、情報源の関連性は不明であるが、当時の板野郡に位置する撫養の町は江戸時代を通じて徳島に次ぐ阿波国第二の商都であったため⁴⁾、情報は比較的集まりやすかった可能性が高い。一方で、那賀郡や海部郡では貝類・頭足類についての項目が少なかった。しかし、サイズや味、価値の詳細が書かれていたため、漁獲対象種や特に重要な水産物に限定していた可能性がある。魚類を含む水産物全体でも郡ごとに記載数や記述内容にはばらつきがあり^{2, 5)}、掲載の基準は不明である。

記載の順序に関して特に規則性は認められなかったものの、名東郡では項目1-6と項目7-8の間に海藻類、鳥類、植物といった異なる分類群の生物が書かれており、何らかの規準で区別して記載していた可能性が高い。那賀郡では1-6と7-8が離れており、海産と淡水産とが区別して書かれていた。

板野郡では「異産」や「製造」以外は比較的まとまって記述されていた。

名東郡では貝類の中で二枚貝についてのみ記述されていた。板野郡でも二枚貝類の項目が多く、両郡ではチョウセンハマグリとハマグリとが区別されていた。和漢三才図会や鳴門辺集にも蛤が阿波、撫養の名物であると記されており^{4, 14)}、他地域と比べてもハマグリ類の重要な産地であったことがわかる。近代まで吉野川河口域のハマグリ類の品質は高く評価されており、数も多いと記録されていたが^{15-16, 24)}、現在その数は減り、吉野川や勝浦川では種苗放流が行われている²⁵⁾。勝浦郡以南では二枚貝類の情報は少なく、海部郡では巻貝のみについて記述されていた。先述の通りサイズや味に関する情報が含まれており、アワビ類（マダカアワビ、メガイアワビ、クロアワビ、トコブシ）やサザエをはじめとした巻貝類や、カキ類（マガキ、イワガキ）、タイラギ等の一部の二枚貝類が重要な資源であったことが伺える。現在も漁獲される種ではあるが、アワビ類3種については種ごとの価値が現在と異なっていた可能性が示唆された。

今回、郷名（地方名）や詳細な説明を欠く項目については特定が難しく、種まで特定できたのは全体の一部だった。殻形態が類似する種も存在するため、実際に1種のみを指しているかどうか不明である。しかしそうした中でも、貝類や頭足類の当時の利用やその地域性の概観的特徴が見えてきたことは興味深い。近年、地域の特徴的な生物（固有種、希少種）が地域活性化のための資源の一つとして注目されている²⁶⁾。現在使われていない、まだ顕在化していない未利用資源も十分に可能性を秘めている存在である。過去の生物利用に着目することは資源の発掘手段としてだけでなく、そのストーリー性から価値づけの手段としても有用と考えられる。今後は別の分類群についても詳細を明らかにしていく予定である。

VI 参考文献

- 1) 寺島良安（島田勇雄，竹島淳夫，樋口元巳訳注），1989. 和漢三才図会 14. 平凡社，東京.

- 2) 徳島県漁業史編さん協議会編, 1996. 徳島県漁業史. 徳島県漁業史編さん協議会, 徳島.
- 3) 阿南市史編さん委員会編, 1987. 阿南市史第一卷(原始・古代・中世編). 阿南市教育委員会事務局, 阿南.
- 4) 鳴門市史編纂委員会編, 1988. 鳴門市史下巻別冊－鳴門辺集. 鳴門市, 鳴門.
- 5) 阿南市史編さん委員会編, 1995. 阿南市史第二卷(近世編). 阿南市教育委員会事務局, 阿南.
- 6) 石原侑, 1989. 阿波誌(土産編)補訂－『阿波志』を産物誌資料として利用するために－. 徳島科学史雑誌 8:19-22.
- 7) 佐野之憲(笠井藍水訳), 1976. 阿波誌. 歴史図書社, 東京.
- 8) 岡本正豊・奥谷喬司, 1997. 貝の和名. 相模貝類同好会, 横須賀.
- 9) 平凡社地方資料センター編, 2000. 徳島県の地名(日本歴史地名体系). 平凡社, 東京.
- 10) 肥後俊一・後藤芳央, 1993. 日本及び周辺地域産軟体動物総目録. エル貝類出版局, 八尾.
- 11) 奥谷喬司編, 2017. 日本近海産貝類図鑑第二版. 東海大学出版部, 平塚.
- 12) 日本国語大辞典第二版編集委員会, 2000-2002. 日本国語大辞典第二版. 小学館, 東京.
- 13) 浜田善利・古賀朋子・村上誠愨, 1979. 貝類生薬の本草学的研究(第2報)海蛤・文蛤について. 薬史学雑誌 14: 53-66.
- 14) 寺島良安(島田勇雄, 竹島淳夫, 樋口元巳訳注), 1987. 和漢三才図会 7. 平凡社, 東京.
- 15) 板野郡教育会編, 1972. 板野郡誌下巻. 名著出版, 東京.
- 16) 鳴門市史編纂委員会編, 1976. 鳴門市史上巻. 鳴門市, 鳴門.
- 17) 黒田徳米, 1961. 目八譜昭和同定録. Venus 21: 365-388.
- 18) 浜田善利・村上誠愨, 1978. 貝類生薬の本草学的研究(第1報)馬刀について. 薬史学雑誌 13: 1-8.
- 19) 安田健編, 2003. 江戸後期諸国産物帳集成 第XV巻－阿波・淡路[諸国産物帳集成第II期]. 科学書院, 東京.
- 20) 笠井藍水編, 1957. 日和佐町郷土誌. 徳島県日和佐町公民館, 日和佐.
- 21) 徳島県板野郡松茂町誌編纂委員会編, 1976. 松茂町誌下巻. 松茂町誌編纂室, 松茂.
- 22) 岡田克弘, 1956. 岩礁底生群落への予備資料. 横山昭・田島衛編. 磯漁業地帯－徳島県「阿部・伊島」の構造. pp. 58-64. 阿波研究叢書刊行会, 徳島.
- 23) 小島博, 1992. アワビ雑話(中). 徳島水試だより 11: 5.
- 24) 徳島県史編さん委員会編, 1965. 徳島県史第四巻. 徳島県, 徳島.
- 25) 徳島県, 2021. 種苗放流(https://www.city.tokushima.tokushima.jp/smph/shisei/keizai/nousui/suisan_gyou/kairui.html)
- 26) 環境省. “野生生物の利活用による地域づくり”, 里なび, <https://www.env.go.jp/nature/satoyama/satonavi/wildlife/> (2022年1月25日参照)

謝辞

本研究の内容は、四国大学学際融合研究所での研究活動の成果として得られたものである。研究を遂行するにあたり情報をいただいた徳島県立農林水産総合技術支援センターの皆様、四国の右下いきもの研究会の河野光氏、日本文学科の須藤茂樹教授、田中智子講師、ご助言をいただいた徳島大学生物資源産業学部の浜野龍夫教授にお礼申し上げます。

ABSTRACT

The “Awa-shi” is a regional document compiled in 1815, that describes geographical features, local histories, temples and shrines, local products, etc., of each 10 counties and the castle site in Tokushima Prefecture. The purpose of this paper is to understand the actual situation of the recognition and utilization of biological resources, at that time by examining “local products”, especially mollusks and cephalopods. Since many of the species were written with ancient names, I inferred their species from their names and descriptions of size, characteristics, and local names. As a result of this research the differences of the utilization of resources not only between the localities but also between the past and the present, have been seen.

KEYWORDS: Awa-shi, mollusks, cephalopods, Edo era, Tokushima Prefecture